

# 学校の見守りという「手づくりのケア」

## 岡村中学校区(磯子区)

### 1 まちの特徴

岡村中学校区は、滝頭地区連合町内会、磯子地区連合町内会、岡村地区連合町内会の三つからなっている。市電の通る旧市街地として戦前から発展してきたまちであるが、それぞれ地区の特性がある。滝頭地区は高齢化が進



み、下町の風情の残るまちなみである。磯子地区内には、活気のある屋根付き商店街浜マーケットがあり、岡村地区は学区の中では、比較的奥まった丘陵部にある。

岡村中学校は、1949年創立の公立中学校で生徒数は500人を超える中規模校である。JR根岸駅からバスで10分ほどの距離にある。

生徒の7〜8割は旧市街地に住み、特に、高齢化の進んだ滝頭地区は地域に愛着をもつ下町気風の住民が多い。保育園でも地域の見守り活動にエントリーしてくれる人が多い、という。一方で、学区内には新しいマンションも建設され、新興の戸建分譲地もあるなど、横浜の地域コミュニティのモザイク的な要素をもつ地域である。地域の活動を担っている人々は、戦前から住んでいる住民が多い。



DATA	岡村中学校区		
	人口概数	世帯概数	高齢化率
1985年	28,000人	9,600世帯	11.5%
2000年	30,200人	11,800世帯	18.0%
2010年	29,200人	12,100世帯	23.4%

### 2 中学生の居場所問題

「暮らしやすさの調査」で地域環境の様々な側面を評価してもらったところ、最も評価の低かったのは青少年の居場所であった(「地域の中に中学生や高校生が過ごせる場所がある」に對して「そう思う」「どちらか」とそう思う)11.4%。「どちらか」とそう思わない「そう思わない」は49.2%であった)。つまり中学生になると地域の中に行き場がない、と答える人がとても多い、ということである。中学生の場合、部活動へ参加をすれば夕方まで学校にいることになるが、帰宅部と言われる部活動に参加しない生徒は年々増え続けている。

岡村中学校区の「子どもの幸せを実現する会」の取組とは、中学生という最も難しい年代の子どもたちが、集団で「家庭」と「学校」からの逸脱状態になった時に、これを学校から排除するのではなく、学校と地域の連携によって再び学校の中に居場所を確保するに至ったという取組である。市内に課題の多い中学校が時折出現する中、住民誰もが願うこのような取組がなぜ実現したのか。

暮らしやすい地域社会指標の中の「手づくりのケア」の代表的な取組として磯子区岡村中学校区の「子どもの幸せを実現する会」の実践

を取り上げる。

### 「子どもの幸せを実現する会」の発足 地域の情報共有と実践の場

この地区の中学校では、30年ほど前より課題が多発する時期が何回か訪れ、地域の中でも区役所としても何度も関係会議などを結成したが有効な取組とはならず自然消滅していった。

磯子区はこの学区の問題を、平成20年度の市民局所管の「身近な地域・元気づくりモデル事業」に位置付け「長期的視野にたつて問題解消まで継続して取り組んでいく方向で、地域、警察、学校に趣旨説明していくことの方針決定」した。このことが大きなはずみとなり、平成20年9月「子どもの幸せを実現する会」が発足、滝頭地区連合、岡村地区連合、磯子地区連合からなる岡村中学校区の未就学児から中学生を対象とし、全体会は各地区の自治会・町内会、青少年指導員、民生児童委員協議会、保護司会、保育園、小・中学校とそのPTA、総勢120人と地域総出の横連携の会となった。会長には、民生児童委員協議会の主任児童委員であるK氏がなった。ちなみに、K氏は岡村中学の卒業生であり、元PTA会長、そして主任児童委員を長年務めてきた方である。

### 〈教室からはみ出た生徒に学習支援や お話相手も11班の活躍〉

第1回目の全体会では5つのグループに分かれて討議を行った。当初、保護者の問題、教師の

問題としてのみ捉える意見もかなりでた、という。しかし、学校側からも地域に協力を求める中で、「それぞれ今の活動から少しだけ手を伸ばし足を伸ばしてできることをしてみよう」ということになった。

活動は、大きく5グループ、11班に分かれて行うことになった。廊下清掃などを行う「環境美化班」、学習支援やお話し相手を行う「生徒支援班」、「報道班」、あいさつやパトロールを行う「地域見守り班」、民生委員による全クラスの授業参観を行う「学校見守り班」である。すでに行われていた「あいさつ」「見守り」「声かけ」に加えて新たに立ち上げたのは、「学習支援」「お話し相手」「エリマネニュースの発行」ということである。学習支援は「教室に入れない子どもたちに少人数教室を確保し、塾の先生にもきてもらい、1対1の丁寧な学習支援を行った。また、授業に参加できない子には「お話し相手」として元警察官や元気推進員である元校長がじっくりと対応。現在11班の活動は、図のとおりである。学校の先生たちの必死の頑張りもあり、教室外生徒はだんだん少なくなっていく。現在では、「学習支援班」は「文化・学習班」と名前を改め、放課後等に習字、茶道、折り紙、夏休みの学習、料理教室などを行っている。

### 〈中学校内の地域交流室を活動拠点に 学校を開き地域とつながる場〉

「手づくりのケア」には活動拠点が欠かせない。モデル事業として予算がついたこともあり、中

学校の中にある地域交流室を「実現する会」の事務局とすることができた。磯子区の当時の地域元気推進員であるSさんは、もともとこの中学校の副校長であり、他校の校長を経て定年退職した後、区の意向もあり地域元気推進員に選ばれた人である。Sさんは中学校の中を熟知しており、先生の信頼も厚い。Sさんは地域交流室に実現する会の事務局を設置するなど区役所と地域の活動と学校という三者を結ぶキーパーソンとなった。また、常駐する事務局スタッフのYさんは元PTA副会長である。学校内での先生や生徒たちの状況を細かく把握し、学校と「実現する会」の活動をこまめにつなぐことになる。

また、学校が問題を抱えた時に「閉じずに開く」ことができたのは、学校の先生たちがやるべきことをやり、頑張りぬいたからこそできた信頼関係の賜物といえよう。



## 〈学校の努力〉

地域交流室のYさんは、先生方の面倒見のよさに敬服する、という。教室に入らない生徒が交流室にくることもある。そうすると先生たちが入れ替わり立ち替わり見に来てくれるのだ。たとえ、授業の空き時間があっても職員室に戻る先生は一人もいない。学年全体で生徒の様子を見て声掛けや他のクラスの応援体制をとっているのである。2年前に赴任した現校長先生は、先生たちの頑張りに目を見張った。生徒と先生の信頼関係を築くには時間がかかるとおし、ぶつかり合いながらも信頼関係を築くことを目指したいという。

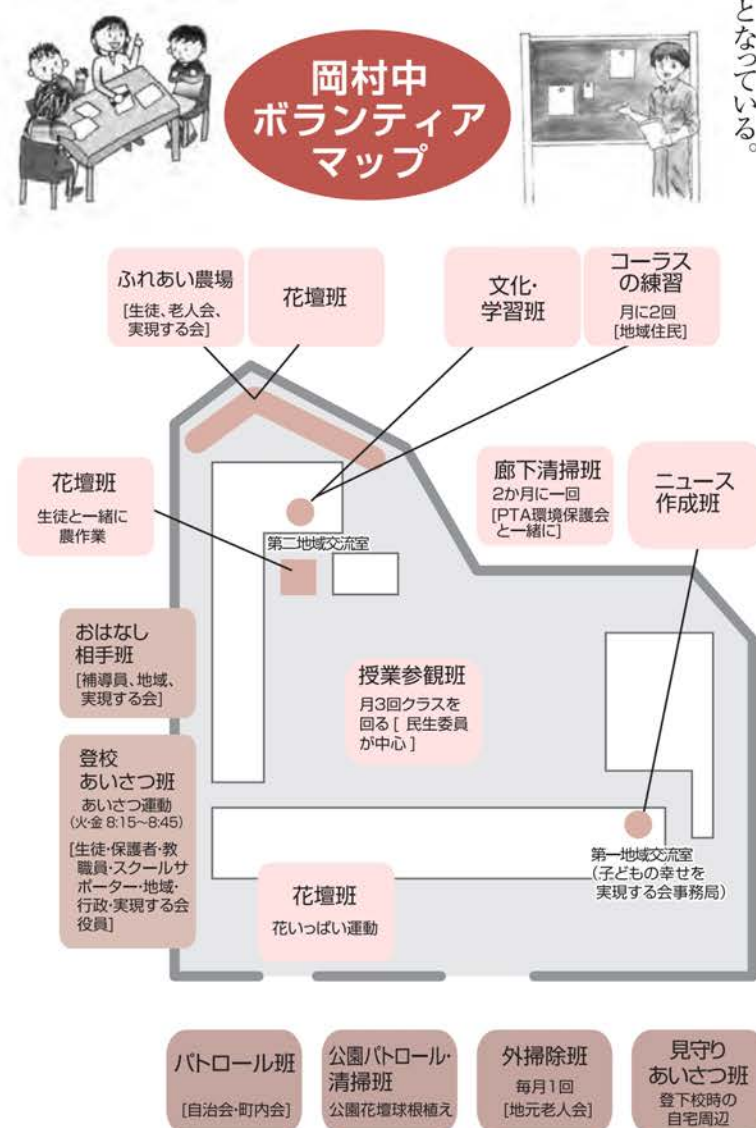
廊下を歩いていると、生徒も先生も元気に挨拶をしてくれる。廊下には「ゆつくり幸せになろう」という親からのハートメッセージが貼られて、暖かい雰囲気漂っている。

## 〈知恵と人手の循環。わずかな資金で得る地域の安定〉

「実現する会」の特徴は、地域の情報共有と実践が結びついたことにある。とくに、学校と地域の信頼関係のもとで、Kさん、Sさんというキーパーソンが、その知恵と経験、ネットワークを存分に生かし、それぞれの人ができることを無理なく活動する舞台をつくったことである。また、区役所が率先してこの学区の問題を地域課題としてモデル事業に決断したことも大きい。わずかではあるがモデル事業の経費

と子ども青少年局の経費で拠点の整備や常駐するスタッフが位置づけられ問題解決に大きく貢献した。

「実現する会」の発足から4年が経ち、モデル事業が終わった後「長期的視野にたつて問題解決まで継続して取り組んでいく方向」の今後はどうなるのであろうか。子どもの育ちを支える地域の力が継続して生かされるような、地域の仕組みが必要なことはいまでもない。幼少期から中学生まで地域の中で暮らす以外にない子どもにとって、居場所、見守り機能は、全市共通のコミュニティ・インフラである。今後は、拠点の活動を維持するための資金のやりくりが課題となっている。



地域の方が自分にできるボランティアを	
ボランティア班	活動場所
第1班 廊下清掃	廊下
第2班 外清掃	外周
第3班 花壇	花壇・廊下
第4班 文化・学習	第二地域交流室
第5班 おはなし相手	廊下
第6班 ニュース作成	第一地域交流室
第7班 見守りあいさつ	自宅周辺
第8班 地域パトロール	地域
第9班 公園パトロール・清掃	公園
第10班 授業参観	教室
第11班 登校あいさつ	校門